Illust Asuka Watanabe・Akari　Design Taeko Isu

contents

01 ご挨拶

2021年度活動概要 ―― 04

02 2021年度 活動のご報告

動画配信プラットフォーム THEATRE for ALL ―― 06

「Backstage of THEATRE for ALL No.03｜あらゆる当事者の声を聞き、皆で育てる：誰もが使いやすいウェブサイトをつくるために」 ―― 10

ラーニング ―― 12

活動レポート ―― 14
「普段は聴こえない音を聴いて、“電磁な耳”を開く：視覚障害者と「エレクトロニコス・ファンタスティコス!」を体験するワークショップ」

劇場をつくるラボ ―― 16

活動レポート ―― 18
「鑑賞することが、日常の選択肢の中に入ってきてほしい
―自由な「鑑賞する身体」のためのTHEATRE for ALL LABの実践」

まるっとみんなで映画祭 ―― 22

見える言語・動く言語 ー手話で感じる世界の見え方ー ―― 24

100の回路 ―― 25

その他のイベント ―― 26

03 THEATRE for ALL のこれから

プロデューサーインタビュー「知りたい、やってみたい、繋がりたい」人々の好奇心を刺激し満たす劇場へ ―― 28

PUBLICITY ―― 30

サポートのお願い ―― 31

＼ THEATRE for ALL の扉を、開け続ける ／

私たちは、「劇場」を通して、多くを与えられてきました。
人生の豊かさ、他者の苦しみや喜び、現実と物語をつなぎとめる詩情、現在を読み解く視点、そして語り合える仲間との出会いーそして、私たちは、アーティストらの視点を「劇場」から社会に投じてきたつもりです。
しかし、本事業の構想を通じて考えたのは「劇場」への扉は本当に開かれていたのか、無意識に誰かを疎外していなかったのかということでした。過去の名作映画やロングラン公演を続けている舞台を「誰もが知っている名作」などと、本当に説明していいのだろうか?自らの無知と無関心が「劇場」への道を塞いでいたのではないか?劇場という建物のせいでも、制度のせいでも、誰かのせいでもなく、他でもない自分たちが、障害を生んでいたのはないか?THEATRE for ALL を実行することは、それらに向き合うプロセスでもありました。

先日、九州大学の長津結一郎先生から「ズレを見つめ、ここで得た知見を糧に、行動変容まで行かなければならない」という鋭いご指摘を受ける機会がありました。長年アーティストとの創作に携わってきた会社プリコグだからこそ、そして「for ALL」な劇場を作ろうとしている自分たちだからこそ、変えられることがあるはずであり。そこを目指さなければ意味がないのだということを、改めて捉え直しました。観る側や鑑賞環境の変容だけではなく、創る側の意識や手法の変化、さらには、そこから新たな表現を生み出していくことに挑戦し続けなければなりません。

身体の多様性に耳を傾けることは、誰にとっても豊かな世界を感じるきっかけにもなるはずだし、社会の不均衡に対して目を向け、明日を変えていくこと、「表現」の未来を切り拓くことは、芸術の創作を支えてきたと自負する我々のミッションだと思っています。

私たちは入り口にやっと立ったところです。それぞれの生活、それぞれの環境、それぞれの障害、皆一人一人違います。万全であることは難しいけれど、諦めない。「THEATRE for ALL」(シアター・フォー・オール)とは、みんなの劇場という意味です。
for ALL とは何かを問い続け、その実現を目指そう、という、私たちの意志と願いを込めた名前です。

道のりははるか、でも一歩一歩確実に踏みしめて進もうと思います。

立ち上げの1年を支えてくださった多くのみなさまに感謝申し上げますとともに、これからのこの「劇場」を支えてくださいますよう、使ってくださいますよう、ともに明日を切り拓く旅路にお付き合いくださいますよう、
何卒よろしくお願い申し上げます。

THEATRE for ALL ディレクター　金森香

2021年度活動概要

だれでも、いつでも、どこからでも。
ひとりひとりが繋がれる“劇場”。劇場体験に、アクセシビリティを。

THEATRE for ALLは、日本初のバリアフリー芸術鑑賞プラットフォームを実現することをミッションとし、子どもから大人、お年寄り、聴こえない人、見えない人、車椅子で移動する人、使う言葉が異なる人、育児・介護をしている人、海の向こうで暮らしている人。環境や身体のちがいから劇場を訪れなかった人が、別の方法で“劇場”にアクセスできるようになれば、ひとりひとりの日常もひとつひとつの作品も、もっとおもしろくなるはず――。そんな思いから生まれました。

新型コロナウィルスの影響下で、新たな芸術表現の発信方法が求められています。また、日本では、映画における音声ガイドの普及率一つとっても米国の十分の一程度であり、演劇やダンス作品においてはそれを下まわります。私たちは、ひとつでも多くの映像作品の鑑賞機会が、障害者や日本語が母語ではない方、またこれからの未来を担う子ども達に開かれていくことを目指し、日々活動しています。

THEATRE for ALLの3つの軸

アクセシビリティ

アクセシビリティ：多言語字幕・手話通訳・音声ガイドなどをつけて、時間や場所にしばられず、自分なりの“劇場”を体感できるサービスを開発・提供します。

ラーニング

解説動画、アーティストや学者などによるワークショップを通じ、個性の異なる参加者同士の触発と、創造的アクションにつながる学びの場を作ります。

LAB

文化芸術へのアクセシビリティを開いていくための活動です。思考し議論していくためのリサーチやインタビュー、配信作品・記事・ラーニング事業に繋げるコミュニティ活動などを実施しています。

私たちは、この1年、手探りながらも、バリアフリーを前提とした 55 作品の動画を配信するサービスを提供してきました。オープン時に作品を配信したアーティストや団体のうち半数以上は、字幕や音声ガイドなどのアクセシビリティを動画につける経験自体がはじめてでした。オンライン、オフライン含めて、約 50 プログラム開催されたラーニングには、子どもから大人まで、アート好きからビジネスマンまで、様々な方が参加してくださいました。そのほかにも、映画祭、オンラインのイベント、情報発信活動など様々に取り組みました。

本事業を共に作り上げていただいているパートナーの皆さまからも、バリアフリーを前提としたアートの鑑賞の場を継続していくべきだとお声をいただいています。一朝一夕のことではなく、試行錯誤の日々ですが、芸術を鑑賞し、味わうという喜びの先に、対話する力や日常へ持ち帰れる視点を得ていただけるようなプログラムを目指し、これからも活動して参ります。

2020	11月	文化庁収益力強化事業 「バリアフリー型の動画配信プラットフォーム事業」にて作品公募 （応募数110件、採択数21件）
2021	2月	オンライン型劇場「THEATRE for ALL」・「THEATRE for ALL LAB」オープン
		THEATRE for ALLラーニング「2つのQ」配信スタート（全33本）
		「100の回路」連載開始（全30記事）
		「劇場をつくるラボ」スタート（全5福祉施設）
	3月～6月	「THEATRE for ALL ファシリテータースクール」第一期　開催
	4月	無料会員数　2000人達成
	5月	支援会員サービス スタート
		「劇場をつくるラボ」クラウドファンディングにて44万円を達成
	6月	アーティストトーク「表現とバリアフリー」スタート（全6回）
	6月～8月	真夏のワークショップスペシャル 子どもからユースまで「踊ろう・奏でよう・演じよう・対話しよう!!」開催
	7月～8月	特集企画「見える言語・動く言語ー手話で感じる世界の見え方ー」開催
	7月	月額会員サービス スタート
	8月	バリアフリー相談窓口 開設
		Palabra×THEATRE for ALL「バリアフリーグラント」配信作品公募開始
	10月	2021年 グッドデザイン賞　受賞　GOOD DESIGN
	11月～22年2月	「THEATRE for ALL ファシリテータースクール」第二期　開催
	12月	「まるっとみんなで映画祭」開催 会場：the Green（千葉県印西市）、オンライン
2022	2月	無料会員数　4000人達成
	3月	福祉施設の生活と鑑賞を考える「劇場をつくるラボ」公開報告会　開催

動画配信プラットフォーム THEATRE for ALL

作品視聴はこちら

イラスト：Asuka Watanabe

多様性にこたえるバリアフリー配信動画

日本初、バリアフリーと多言語に対応したオンライン型劇場のTHEATRE for ALLは、オリジナル作品を含む映像作品55作品、ラーニングプログラム36本の動画作品を配信しています。幅広いジャンルの作品を鑑賞サポート付きで視聴できるほか、解説動画や鑑賞前後のワークショップなどのラーニングプログラムも充実しています。オンラインサービスなので映画館や劇場に足を運びづらい方にも安心して、好きな時に、好きな場所で、パソコンやスマートフォンからご自分のペースで楽しむことができます。

配信作品のアクセシビリティ対応

THEATRE for ALLは、2021年2月5日、サービスを開始しました。第１弾の配信作品は、文化庁委託事業「収益力強化事業」として配信する作品を様々な分野から公募し、全110件の応募の中から審査を行い、21作品を公開しました。

作品ごとに付与されるアクセシビリティ対応・鑑賞サポートはアーティストや制作会社、専門家と相談の上でそれぞれに実施する内容を都度、検討しています。そのため、作品によって施される対応が異なります。その検討のプロセスは、アーティストや制作者に作品が「届く」というのがどういう意味なのかを問い直すこともあります。例えば「ダンス作品を視覚に障害がある鑑賞者に届けるには?」といった問いに対して、鑑賞サポートのあり方を考え直していくことは、鑑賞者の幅を広げるとともに、新しい芸術表現や情報保障のあり方を再発見していくことにも繋がっていきます。この試行錯誤の過程は、作品を生み出し届ける側にとっても、鑑賞する側にとっても学びが多く、可能性に満ちた場となっています。

配信作品のジャンル

- 映画・ドキュメンタリー 29本
- 舞台・演劇 18本
- ダンス 5本
- 現代アート 9本
- ドラマ・芸能 9本
- デザイン 1本
- 実験映像 3本

アクセシビリティの種類

- バリアフリー字幕 32本
  日本語24本、英語6本、韓国語2本
- 手話 27本
  日本語26本、手話パフォーマンス1本
- 音声ガイド 19本
  日本語16本、英語3本
- 多言語字幕 18本
  英語13本、中国語2本、韓国語1本、スペイン語1本、ポルトガル語1本
- 吹き替え 3本
  日本語1本、英語2本
- その他 4本
  作家オリジナル、UDcast2本

オンラインサービスのアクセシビリティ設計

サイト設計の段階から、専門家と障害当事者へのヒアリングを重ね、誰にでも使いやすいサイトを目指しました。「スクリーンリーダー」と呼ばれる読み上げ機能を意識したサイトデザインや弱視や視覚障害の方にも配慮したフォントカラーやサイズなどを使用しています。動画視聴ページでは、その作品が対応している複数のアクセシビリティからユーザーが自分にあったものを選んで作品を視聴することが可能です。配信期間中は、購入した作品などを何度でも繰り返し自分のペースで見ることができ、繰り返し作品を味わいたい方や長時間の視聴にハードルのある方も安心して楽しめるよう設計しました。

参加クリエイターからのVoice

地方に住んでいると、好みの演劇に触れられる機会が少ないので、オンライン上演がより増えて欲しい。また、すべての演劇に音声ガイドをつけるのは難しいだろうけれど、わずかでもその取り組みが増えてくれれば大変有難いことである。

視覚障害
PARCO プロデュース
「僕の穴、彼の穴」視聴者

私は音は聞こえますが、セリフや歌の内容を理解することはできません。舞台が好きで、観たいと思った作品は台本をお借りして観ていますが本当に面白かったと思うのは、ごく限られた"字幕付き"の舞台だけです。誰が喋っているかということがデザイン的にもわかりやすく、手話通訳者のいる窓も画面のデザインに溶け込んでいて素敵な映像でした。

APD（聴覚障害処理障害）
東陽一「絵の中の僕の村」視聴者

舞台で手話通訳、字幕付きとなると、双方を見る大変さがあるが、画面配信では一体して見ることができ、また顔をズームアップで見れることが画面でのメリットだと思う。また、子育て中には好きな時に観れることもうれしい。

子育て世代
「鍾馗 -SHOKI-」
視聴者

制作者からのVoice

普段は、映画・演劇分野の方々と一緒に、字幕や音声ガイド制作をしていることが多いのですが、今回、ダンスやパフォーミングアーツなど私たちにとっても新たな分野の方々とご一緒できたのは大きな収穫でした。アーティストや製作者との対話で作り上げていくバリアフリーの可能性や面白さを改めて感じました。

Palabra 株式会社　山上庄子

ラーニング

詳細はこちら

新たな想像力や視点の発見がある学びの場

「THEATRE for ALLラーニング」は作品をもっと感じて楽しむための学びのプログラムをオンライン、オフラインで開催しています。障害・世代・職業など多様な立場の芸術鑑賞者が混ざること、多様な分野のアーティストや専門家と交流することを通じて、参加者が新たな視点を得る場づくりを大切にしています。

ワークショップでは、THEATRE for ALLの配信作品を題材にすることも多く、ワークショップ参加者の声をつくり手側にフィードバックをするなど動画配信とラーニングで双方に新しい気づきや学びを循環させられるように設計。芸術鑑賞を通じて、様々な角度から豊かな視点や気づき・発見と出会う学びの場を生み出します。

イベント企画の軸

「表現」「知識」「創作」「鑑賞」の4つのキーワードを軸に設計し、終了後は、その成果をルーブリック評価によって振り返ります。7つの評価ポイントを3段階で批評することで、常に客観的な評価軸を持ちながら、プログラムの品質向上を目指しています。

学習における評価ポイント

①お互いの違いを尊重する意識
②インクルーシブな場を経験する
③社会参加意欲
④創作的チャレンジ
⑤新たな文化との出会い
⑥対話力（言語的自己表現・思考力）
⑦対話力（傾聴・寛容性）

ラーニングディレクター：中村茜（株式会社precog）
ラーニング監修：株式会社ミミクリデザイン（～2021年3月まで）
ラーニング担当：栗田結夏（株式会社precog）、山本さくら、星茉里

対話型ワークショップ

目の見える人、見えない人が一緒に映像をミて、映像と言葉の新しい楽しみ方やとらえ方を発見していく「ミるミる見るツアー ~映像を聴いて、語るワークショップ~」と、日々の忙しい生活のなかでは通り過ぎてしまうような疑問を、あえて立ち止まって、みんなでゆっくりじっくり考える哲学対話「てつがくタイム ~ モヤモヤを楽しむ対話の場~」を用意しています。

「ミるミる見るツアー ~映像を聴いて、語るワークショップ~」
全 11 回の開催　参加者 77 名

「てつがくタイム ~ モヤモヤを楽しむ対話の場~」
全 12 回の回数　参加者 66 名

表現型ワークショップ

アーティストと一緒に手法のみならず、作品やテーマについて考え、感じる力や表現する力を刺激する参加型プログラム。オフラインの出張型からオンライン、子どもから大人まで、さまざまなプログラムをご用意。演劇、ダンス、音楽、工作、詩、彫刻、写真、映像などのさまざまな表現に触れることができます。

解説動画「2 つの Q」

アーティストや研究者、デザイナーなど配信作品をテーマに、関連する方々が登場し、作品をもっと深く感じたり解釈するための約10分程度のウォーミングアップ動画です。中学生以上が理解できる言葉で解説されており、ラジオのような構成で視覚障害のある方も楽しめ、手話通訳・バリアフリー日本語字幕が付いています。

全 33 本　2つのQ動画制作：株式会社HOEDOWN

ファシリテータースクール

「正解のない問いをめぐって、さまざまな人が安心して対話・創作に参加できる場をつくる技術」を実験しながら体得する学びの場です。さまざまな人が参加するインクルーシブな場をどのように実現し、そこでの対話をどうファシリテーションするか、必要となる心構えや知見を身につける約3か月間の実践プログラムです。

ファシリテータースクール　第1期
主催：株式会社precog、一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL
企画・運営：株式会社ミミグリ
1期生　応募数：65 名　受講生：21 名　制作ワークショップ数：5 本

ファシリテータースクール　第2期
主催：株式会社precog、一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL
企画・運営：NPO法人おとな哲学こども哲学 アーダコーダ
2期生　応募数：27 名　受講生：15 名　制作ワークショップ数：4 本

他社とのコラボレーション企画

全国の企業や行政機関、教育機関、福祉施設、美術館や劇場、アーティスト・イン・レジデンスとの取り組みも行っています。アートや多様性のある交流の場を外に開き、学びの場を地域や組織の皆様と対話しながら創出します。事業連携、お仕事のご相談を現在も広く募集しています。

オフサイトワークショッププログラム協力：開智望小学校、軽井沢風越学園、
株式会社mother dictionaly
（代官山ティーンズクリエイティブ、景丘の家）、
PARADISE AIR、認定NPO法人PIECES、
一般社団法人Life is（+laugh）、
刈谷市総合文化センター アイリス

オンラインワークショッププログラム協力：NPO法人おとな哲学こども哲学 アーダコーダ、
視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ、
山口情報芸術センター［YCAM］、
日本財団DIVERSITY IN THE ARTS、
株式会社ミミグリ

参加者からのVoice

そんな見方もあるのか!それは見えていなかったなーなど驚きの連続でした。作品やメッセージが立体的に見えてきたことが変化でした。ドキュメンタリー映画も作り手の“何を伝えたいか”の目線で編集されたもの、一つの見方であり、それとは違う見方や盲点に気づかせてくれるのが対話なのだなと感じました。

ミるミる見るツアー対象作品：「描きたい、が止まらない」参加者

一つの作品という共通点で、ここまで対話が広げられるのか、という気づき。作品というのは鑑賞だけで終わらないことを再認識した。

てつがくタイム ～モヤモヤを楽しむ対話の場～
お題：「ルール？」参加者

（保護者コメント）初めてワークショップに子ども1人で参加して、親の方が不安でしたが杞憂に終わりました。本当にとても楽しかったようで、また同じ事をやりたい、他のワークショップにも参加してみたい、と前向きな言葉が出ています。全員が楽しめる内容で良かったです。ありがとうございました!
（参加者コメント）色々な楽器や音楽を作ったり弾いたりして学校の音楽の時間ではできないことができた。

「ボクの穴、彼の穴。」姿の見えないひとを音で感じるワークショップ参加者

まるっとみんなで映画祭

開催期間 | 2021年12月4日～2022年2月末
開催場所 | 千葉県印西市 複合施設「theGreen」&
https://theatreforall.net/special/marutto_minnade21/

映画祭のメインビジュアルには「いんば学舎」通所者の汾陽孝俊さんのイラストを起用
Photo by Ryohei Tomita

誰もが楽しめるインクルーシブな映画祭

「まるっとみんなで映画祭」は、大人も子どもも、障害のある人も、言葉がわからなくても、みんなが楽しめるインクルーシブな映画祭です。さまざまな人がまるっと混ざりあい、共に集うことができるイベントを目指しています。
初開催の今年は、ドライブインシアターの野外イベントとオンライン配信で開催。配信では視覚・聴覚や移動に関するバリアフリーを実現しながら、リアルイベントでは野外でのノンバーバルな作品上映や参加型作品を通じて、特に知的・発達などの障害のある方や小さいお子さんのいるご家庭でも参加しやすいイベントを目指しました。
本事業は、次年度も引き続きの継続開催を計画しています。

ドライブインシアターとフレンドリー上映

本映画祭のオープニングとして、2021年12月4日千葉県印西市の複合施設「theGreen」で野外イベントを開催。大きなひとつのスクリーンを自分の車の中から鑑賞するドライブインシアターを実施しました。半分パブリックで半分パーソナルとも言えるこの方法は、来場者それぞれが、車ごとに音量を変えたり、気分転換に車の外に出るなどマイペースに映画を楽しめます。映画館や劇場とは異なり、リラックスして、話したり、食べたり飲んだり、周りを気にすることもありません。

上映中に席を立って歩き回るのも声を出すのもOK、鑑賞スペース内にピクニックシートを敷いて芝生に寝転んでも鑑賞できる野外上映「しばふシアター」を実施。ドライブインシアターとしばふシアター、両方の取り組みを通じて、障害のある方やお子様連れの方にも、気兼ねなく映画をお楽しみいただけるような、「フレンドリー上映」が実現しました。

ノンバーバルな作品と、障害について考えるきっかけづくり

「まるっとみんなで」というタイトルには、誰もが一緒に楽しめる場をつくりたい、という思いが込められています。野外上映では、人気テレビ番組「シナぷしゅ」やチェコのアニメーションなど小さなお子さんや知的・発達の障害のある方でも、目で見るだけで楽しめる作品をラインナップ。ドライブインシアターでは、映画を通じて自閉症の主人公が言葉を獲得していくプロセスを描いたドキュメンタリー映画「ぼくと魔法の言葉たち」を上映しました。続いて開催したオンライン配信では、字幕や音声ガイド付きの映画を中心に障害と表現を扱ったドキュメンタリー作品なども加えて全10作品、解説動画3本を配信。「シナぷしゅ」について東大赤ちゃんラボ関教授が解説するラーニング動画「2つのQ」もオリジナルで制作しました。

主な上映・配信作品
「ぼくと魔法の言葉たち」ロジャー・ロス・ウィリアムズ / 「シナぷしゅ」テレビ東京 /「もるめたも」Reframe Lab /チェコアニメーション「ぼくたちものせて!」「娘」「Fruits of Cloud」 /「Waltz」「Twins in Bakery」「Decorations」（お弁当アーティスト宮澤真理による短編）/「花子」「まひるのほし」佐藤真 / 他

地域のパートナーや障害当事者とつくる映画祭

今回のオリジナル制作の参加型アニメーション「まるっとみんなで、ももたろう」では、事前ワークショップで多くの方に参加いただきました。印西の福祉施設「いんば学舎・オソロク倶楽部」、児童発達支援 放課後デイサービス「ほっぷ（いんば学舎）」の方々や千葉ニュータウンナーサリースクールの子どもたちが映像の登場人物の絵をそれぞれ描き、当日はそれらが命を吹き込まれたように動き出しました。また、当事者のご家族や介助者の方々へのヒアリングを事前に実施し、イベント参加の障壁となっている事項を我々も学びながら運営・情報発信に活かしました。

混ざり合い、一緒に楽しむ機会をつくり、当事者や地域の声を聴きながら、多様性について考える機会を生み出していける映画祭を目指します。

話すことが得意ではない方や日本語を母国語としない方とのコミュニケーションに活用できる、オリジナルのコミュニケーションボードを館内で配布

総来場者数 352 名
ワークショップ参加者数：40 名
しばふシアター参加者数：約 200 名（50 組）
ドライブインシアター参加者数：約 112 名（28 台）

主催：株式会社precog、
まるっとみんなで映画祭実行委員会
（株式会社precog、一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL）
助成：文化庁 ARTS for the future!
協力：theGreen、いんば学舎・オソロク倶楽部、
ほっぷ（いんば学舎）、千葉ニュータウンナーサリースクール、チェコセンター東京
シアターサポート：Do it Theater　アートディレクション：清水貴栄
題字・グラフィックデザイン：美山有
イラスト提供：汾陽孝俊　会場装飾：安藤僚子（デザインムジカ）

参加者・アーティスト・製作者からのVoice

『ぼくと魔法の言葉たち』を観て、日本は障害者への環境がまだまだ充実していないし、理解されていないと思いました。日本も、障害者の人達も生活しやすい環境になれたらと思いました。
「まるっとみんなで映画祭」 参加者

『シナぷしゅ』が大きなスクリーンで、草っぱらにねころがって、しかも、閉ざされた空間じゃなく大勢の人と一緒に鑑賞されるのは初めてです。そんな場所で、障害のある人たちと子どもたちが出会うきっかけが生まれたら素敵だなと思います。
『シナぷしゅ』 プロデューサー　飯田佳奈子

（今回のメインビジュアルを描いた）汾陽孝俊さんは毎日休憩時間に絵を描いています。絵を描くことは彼の”生活の一部”です。今回の映画祭を通して、孝俊さんの絵をたくさんの方に見てもらえたのは私たちにとっても嬉しいことです。
福祉施設「いんば学舎・オソロク倶楽部」 佐藤直人

障害児の家族の意見を聞いてくださったりと、『障害者もそうでない人もそうかもしれない人も』楽しめるイベントでした!
暗い&大きい音が苦手な娘も安心して楽しめました。
『まるっとみんなで映画祭』 参加者

見える言語・動く言語
ー手話で感じる世界の見え方ー

開催期間 | 2021年7月21日（水）～8月27日（金）

手話という言語と文化を理解し、味わう

まだ世の中への正確な理解が浸透していない手話という言語、そこから広がる手話文化について、たくさんの方に知っていただくための取り組むキャンペーン「見える言語・動く言語ー手話で感じる世界の見え方ー」を開催。手話やろう文化をテーマにした作品や動画の公開やイベントの実施によって、ろう文化への理解を深める場をつくりました。私たち自身も学びながら、手話の正しい理解、表現としての魅力をお届けできるよう、さまざまな取り組みを実施していきます。

手話を味わう特集企画

手話とは、ろうコミュニティで自然発生した言語を指しています。まだ国内でも正しい理解が進んでいないのが現状ではありますが、日本語など音声言語の代替表現ではなく、日本語とは異なるひとつの視覚言語として確立した文化を持っています。字幕付きの作品と比較しても、まだまだ手話付きで鑑賞できる作品は多いとは言えません。しかし、ろう者にとって、字幕だけでは理解が難しい作品の内容も手話があることで理解ができることがあります。

ひとつの言語、表現、文化として、日本語と手話が対等なものとして広まっていく世界を目指して、新作の動画配信からオンラインイベント、オンラインワークショップまで、異なる切り口で迫りました。また、私たちのサービス名「THEATRE for ALL」を表す手話表現も、ろうの若手芸人「デフW」によってお披露目されました。

配信作品

配信作品の中には、レティシア・カートン監督（フランス）が「ろう者の存在を知らせたい」という亡き友人・ヴァンサンの遺志を継いで制作した「ヴァンサンへの手紙」、落合陽一氏が総合ディレクターを務め、山本寛斎はじめ多数のアーティストが参加した「True Colors FASHION 身体の多様性を未来に放つダイバーシティ・ファッションショー」のほか、21_21 DESIGN SIGHT企画展「ルール?展」の「ルール?」など8作品をラインナップしました。

トークイベント

また2021年7月末には、2つのイベントを行いました。一つ目はTHEATRE for ALL オフィシャルナビゲーターでもあるろうお笑いコンビ「デフW」のお笑い鉄板ネタを観ながら語り合うお笑い&トークライブも行い、「ろうあるある」から「ろう文化」を学びました。二つ目はTHEATRE for ALL LAB談話室「異言語ラボ」の作品を観て語りあおうと題して、ろうについての考察を行いました。異言語ラボの和田夏実さんは、イベントの中で「芸術表現としての手話の美しさ」についても触れながら、アーティストとして、「作品をどのように手話という言語表現で伝えていくのかを考えるプロセスの中に沢山の発見や学びがある」とコメントされました。

トーク：「ろうあるある」からろう文化を学ぼう!
日程：7月30日（金）19:00-20:00
出演：今井ミカ（NPO法人シュアール理事長/映画監督）
那須映里（手話エンターテイナー/手話講師/NHKみんなの手話2021準レギュラー）
和田夏実（インタープリター）
https://www.youtube.com/watch?v=mIztb3HOYXI&t=2665s

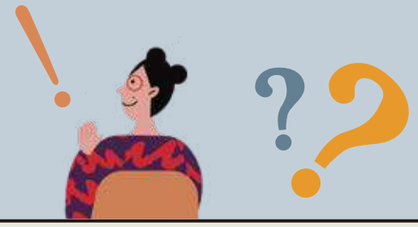
モニター募集

当事者の方々に配信作品を無料でご鑑賞いただき、サービスや作品のバリアフリーについてフィードバックをいただく「手話つき動画の視聴モニター募集」も行いました。

THEATRE for ALLオフィシャルナビゲーター：デフW
企画協力：シュアール
協力：特定非営利活動法人シアターアクセシビリティ・ネットワーク

100の回路

THEATRE for ALL LAB



アクセシビリティに関する知見や視点を共有する

連載記事「100の回路」では、芸術領域に限らず、様々な現場から生まれているアクセシビリティを考えるための知見や視点を「回路」と名付け、アーティスト、鑑賞者、それに関わるサービスの提供者などさまざまな立場の方々へのインタビューを通じて、新しい議論が生まれていくことを目指しています。アクセシビリティを高めるための知見や視点を「回路」と名付け、アーティスト、鑑賞者、それに関わるサービスの提供者などさまざまな立場のステークホルダーに共有することや新しい議論が生まれていくことを目指しています。

記事連載

「100の回路」では、アーティストのほか、研究家やデザイナー、法律家、美術家、民族学者、福祉器具の開発エンジニア、福祉施設職員、財団職員、海外ルーツをもつ子どもたちの学校職員など多種多様な方へインタービューをしてきました。

回路という言葉は「アクセシビリティ」のメタファーとして用いています。劇場へのアクセシビリティを増やしたい我々の活動とは、劇場（上演の場、作品、そこに巻き起こるさまざまなこと）を球体に見立てたとして、その球体に繋がる道があらゆる方向から伸びているような状態。いろんな人が劇場にアクセスしてこれるような道、回路を増やしていく活動であると言えるさまざまな身体感覚・環境・価値観、立場の方へのインタビューから、人と劇場をつなぐヒントとなるような視点を、100個収集することを目指して連載をしています。
「違う」ことを前提にした対話の中でこそ生まれる、豊かな視点や新しいアイデア。それらをたくさんの人と共有し合い、社会に実装していくことを目指しています。

公開数 30記事 121回路

100の回路#06

生きていることを証明する。一代限りの
儚き表現、アウトサイダー・アートの力
（アウトサイダー・キュレーター・櫛野 展正さん）
https://onl.bz/VciK3mE

100の回路#07

森美術館 白木栄世さんに聞く、
ミュージアムを開いていくということ
（アソシエイト・ラーニング・キュレーター・白木栄世さん）
https://onl.bz/4PZNsLM

100の回路#17

視覚に障害があっても楽しめる
「さわれる」芸術作品とは?
（視覚障害当事者で鍼灸師・美術作家　光島貴之さん）
https://onl.bz/uWzDP9k

100の回路#20

ろう者にもっとエンタメの場を。
手話があることが当たり前な
社会を目指して。
（NPO法人シュアール理事長・今井ミカさん）
https://onl.bz/gidVu84

100の回路#27

放課後デイサービスで働くコンテンポラリー
ダンサーたちに「障害児と関わることで
成長したこと」を聞いてみた
https://onl.bz/yJuxySD

バリアをフリーにするヒント

SNSでは、100の回路からアクセシビリティのヒントになる言葉を引用してご紹介する「バリアをフリーにするヒント」を配信し、共感を広げています。

Instagram
https://www.instagram.com/theatre_for_all/

「知りたい、やってみたい、繋がりたい」人々の好奇心を刺激し満たす劇場へ

©Takuya Matsumi

撮影：高野ユリカ

「劇場体験に、アクセシビリティを」というスローガンのもと、2021年2月にスタートしたTHEATRE for ALL。オープンから100本以上もの映像が公開し、開催されたワークショップは50にものぼりました。あらゆる人がアクセスできるオンライン劇場を目指し走り始めてから1年、どんな課題や成果が生まれたのでしょうか。プロデューサーの中村茜が初年度を振り返ります。

インタビュー：土門蘭（ライター・小説家）

── THEATRE for ALLを企画した動機は?

私はもともとパフォーミングアーツのプロデュースや小さな劇場のプログラムディレクションを行っていたのですが、その中で課題に感じていたのは、舞台芸術界の閉鎖的な環境や、全国的に見ても都心部に集中する中央集権的なあり方でした。言語や文化、地域や表現ジャンルなどのボーダーを超えて舞台芸術を盛り上げていきたいと、「横断」や「翻訳」をキーワードに活動を続けていました。

THEATRE for ALLを企画したきっかけは、2019年に「True Colors Festival　超ダイバーシティ芸術祭」を手がけたこと、2020年にコロナ禍に突入したことです。前者では「インクルーシブ」や「アクセシビリティ」、後者では「オンライン」というキーワードが強く浮き彫りになり、その掛け合わせから「オンライン劇場」という発想が生まれました。このアイデアを中心に据え、よりオープンな劇場のあり方を模索するため2021年にスタートしたのがTHEATRE for ALLです。

── 実際に運営を始めて感じたことは?

壮大なビジョンのもと走り始めましたが、実現には時間がかかることを改めて痛感しました。ただ、ビジョンを共有し、熱意を持って伴走してくださるパートナーさんに恵まれたことは期待以上のことでした。

コンテンツも幅広いジャンルの作品が集まり、情報保障だけではなくラーニングも活かしたアプローチに関しても共感を得られた実感がありました。また作品を提供するとともに、対話や感想のシェアができたり学びを得られる場を作るなど、作品を届けるタッチポイントやコミュニティの設計も同時に行うことで、人と作品を有機的に繋げることができたと思います。

これまで演劇やダンスをあまり観てこなかった観客層が、オンラインであることや情報保障があることでTHEATRE for ALLを訪ねてきてくれたり、これまで音声ガイドで作品を提供したことがないアーティストと視覚障害者との対話が生まれたり、これまで繋がっていなかった人たちを繋げ多くの出会いを生み出せたことは、大きな成果だと考えています。

── その中で印象的だった出来事は?

あるアーティストが目の見えない方に対しての情報保障を行う際、独自のやり方で作品に音声ガイドをつけたことがありました。結果として、同じコンセプトを持つ別の「言葉の作品」となったのですが、それに対して当事者の方から「晴眼者が見ている風景を想像できるような音声ガイドを期待していたのに」という不満が出たのです。一方でアーティストには「晴眼者が見ている世界だけがすべてではないから、耳で作品を感じてほしい」という思いがあります。そのクラッシュによって互いの価値観が揺さぶられ、変容が起きていると感じました。音声ガイドと一言で言っても、様々な鑑賞方法があり得ます。この衝突は、互いの価値観を更新して新しい可能性を生み出す上で欠かせない対話であると感じ、今後も続けていかねばと思った出来事でした。

── 困難や課題に感じたことは?

大きな課題は、コンテンツホルダー側のメリットをいかに生み出していけるかということです。情報保障をして作品を届ける価値自体は伝えられましたが、そもそもこのマーケット自体がまだ知られておらずレベニューシェアも少ない状況です。利益を生み出すことはもちろん大切ですが、それ以外にもこの事業の必要性に対する共感やコミットメントを強く生み出していかないといけません。

もう1つは、THEATRE for ALL内部の育成についてです。新しいことに挑戦する中、スタッフ間での目的や知見の共有の難しさを感じました。今後は10年というスパンを見据え、業界内へのアクセシビリティやインクルーシブな場づくりにおける意義の普及とオーディエンスの拡大など「土づくり」に3年、そしてプリコグのスタッフ含めてコンテンツを作る人たちを育てる「種まきと水やり」に3年、残りはその芽を育てる期間にあて、長期的な視野で事業を築いていきたいと考えています。

── 各業界との関わり、そこで得た成果は?

まず舞台芸術業界においては、情報保障をつけて作品を提供する、ということが業界にあまり浸透していないので、関係者の皆さんに少しでもアクセシビリティについて意識を向けてもらうきっかけが作れていると嬉しいです。業界が時代の要請を受けて「共創共生」「社会包摂」というテーマを掲げているので、オリンピックが終わっても、この機運を繋ぎ止めていけるよう意識して、創作活動や教育普及事業を企画していきたいと思っています。

また、THEATRE for ALLを通じて、福祉や教育現場の方々との協働の機会にも恵まれました。どちらもまだ協働させていただいてる期間が短いので、そこまでの影響力ではないのですが、一般的に考えても、福祉現場では障害者の芸術文化環境を整備する機運は高まっていますし、教育現場でもSDGsや、STEAM教育への注目の高まりから、芸術やオンライン、そして言語や障害などの違いを越えたコミュニケーションの場も求められているだろうと感じます。ですので、THEATRE for ALLでは、オンライン劇場として作品の鑑賞体験を生むだけではなく、THEATRE for ALLラーニングではワークショップや感想シェア会、ファシリテータースクール、THEATRE for ALLコミュニティーラボでは、福祉施設で上映会を行う「劇場をつくるラボ」などの開催を通じて、鑑賞だけではない芸術とユーザー（観客やイベント参加者）の接点をつくり、地域や世代、言語や環境を越えて多様な人々と交流できる場の価値をつくっていきたいと思っています。

── 次年度、特に力を入れていきたい事業は?

1つ目は映画祭の実施です。昨年、リアルとオンラインによるインクルーシブな映画祭「まるっとみんなで映画祭」を実施しましたが、今後も毎年開催していく予定です。多くの方に活動に参加してもらえるようTHEATRE for ALLのアイコンとして育てていこうと考えています。

2つ目は、プロデューサーとしての私の個人的な思いなのですが、人形劇の制作です。人形劇は、絵本のように登場人物の抽象度を上げることが可能で、世代や言語の違いがあっても共に鑑賞を楽しみ、問いの共有範囲を広げることができます。私たちがつくる”劇場”の役割は話題や知名度で大きな規模の人を集めることではなく、人の好奇心を刺激し満たすことだと考えているので、「知りたい、やってみたい、繋がりたい」というオーディエンスの思いを消化できる場所にしたい。そのためにも、実験的で創造的なTHEATRE for ALLオリジナル作品を作り、人を繋げるコンテンツとして育てていきたいと考えています。

── 最後に、次年度の抱負をどうぞ

モットーとして「エンパシー」という力をわれわれの中にもっと育てていきたいと思っています。この言葉は、ブレイディみかこさんの著書『他者の靴を履く──アナーキック・エンパシーのすすめ』（文藝春秋）を読んで意識したいと思うようになりました。
シンパシーを共感する力だとすると、エンパシーは他者を理解する力、想像する力だとされています。ケアワーカーなど当事者を直接ケアする方々には必須なものであり、トレーニングで後天的に養える能力だと言われています。もちろんインクルーシブな場の開発には欠かせない力であり、違いを尊重する場づくりを実践する我々にとってはとても大事な力です。今後は、色んな人が集える劇場としてエッセンシャルワーカーの方達ともより繋がりを持ち、直接人と関わりながらTHEATRE for ALL自体のエンパシーを高めていくことで、より丁寧に劇場を育てていきたいと思っています。

提供：日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS
撮影：佐竹邦彦

PUBLICITY

これまでTHEATRE for ALLが取り組んできた活動について、
この1年でこれらの雑誌やWebメディアなどで活動を紹介いただきました。

2021/3/29 【雑誌・WEB/AERA】	バリアフリーと多言語の新しいオンライン劇場 – ワンクリックで未知の世界が開幕! https://dot.asahi.com/ad/21032905/ （4/5に紙面発売）
2021/4/14 【WEB/日経クレストレンド】	演劇も映画もSDGsへ　すべての人に開かれた劇場を目指して https://xtrend.nikkei.com/atcl/contents/18/00424/00018/?n_cid=nbpnxr_twed_new
2021/4/15 【WEB/CINRA】	蓮沼執太×和田永 変容する社会の中で、音楽を閉ざさないための実践 https://www.cinra.net/article/interview-202104-theatreforall_ymmts
2021/4/15 【WEB/ここ】	バリアフリーのオンライン型劇場〈THEATRE for ALL〉の配信映像から2作品を紹介 https://co-coco.jp/news/theatreforall/
2021/5/25 【新聞/毎日新聞】	国内初バリアフリーのオンライン型劇場　コロナ禍でも社会開く
2021/5/25 【雑誌・WEB/Forbes】	Forbes JAPAN 7月号・WEB版 Forbes JAPAN「Brand Voice」 『「THEATRE for ALL」で見る、知る、学ぶ　真のダイバーシティをすべての人に』 7月号　https://forbesjapan.com/magazines/detail/124 WEB　https://forbesjapan.com/articles/detail/41356
2021/6/5 【TV/NHKワールド】	「The Signs」Breaking Down Communication Barriers https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/ondemand/video/2089013/
2021/6/15 【WEB/日本財団ジャーナル】	『バリアを取り除き、誰もがアートを楽しみ、作れる未来を。 THEATRE for ALLが目指す属性を超えて出会える場づくり』 https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2021/58303
2021/6/22 【WEB/Fasu】	大人にも子どもにも効く「哲学対話」ってなに? https://fasu.jp/series/interview/theatre_for_all/
2021/7/29 【WEB/ハフポスト】	デフジョークって知ってる?ろう者と聴者の文化の違いを、芸術は超えられるか https://www.huffingtonpost.jp/entry/theatre-for-all-4_jp_60ffd89fe4b06e84e320e36e
2021/9/1 【WEB/IDEAS FOR GOOD】	バリアフリーをつくる過程が、クリエイティブだった。みんなの劇場 「THEATRE for ALL」[ウェルビーイング特集 #26 多様性] https://ideasforgood.jp/2021/09/01/theatre-for-all/
2021/12/17 【WEB/cinemacafe】	ひとりひとりが繋がれる劇場『THEATRE for ALL』とは? もりたじり監督×ベビーヴァギー インタビュー https://www.cinemacafe.net/special/12285/recent/THEATRE+for+ALL

媒 体	露出数
WEB	293件
テレビ	1件
新 聞	3件
雑 誌	4件
合 計	301件

ご支援のお願い

個人・法人様のご支援を受け付けています。THEATRE for ALLを継続していくためには、皆様の応援が必要です。どうぞお力をお貸しください。

私たちは、演劇やダンス、映画やメディアアートなどの 文化芸術を、すべての人が分け隔てなく鑑賞できる劇場を目指し、日々活動をしています。一つでも多くの作品に情報保障を行い、障害当事者の方々や必要なお客様に届けていくこと。そして一つ一つのバリアに向き合 い、取り除いていくことの大切さについて、多くの人が考える機会をつくること。
THEATRE for ALLの活動が、社会全体のソーシャルインクルージョン実現の一助となることを目指します。

支援会員

30,000円 / 年

（定額見放題、会員制SNSへの参加、イベントのご招待）

https://theatreforall.net/subscription/

賛助会員

100,000円 / 口

（会員制SNSへの参加、イベントのご招待、
アニュアルレポートのご提出、ご希望者はお名前の掲載）

https://onl.sc/ELuvnwb

その他の支援方法

1支援会員や賛助会員以外にも、100円から1回毎の支援金をお送りいただけます。
ご支援金は特定の作品のバリアフリー対応や全国の福祉施設とのプロジェクトなどに使用させていただきます。

https://onl.sc/QWfMqdh

THEATRE for ALL

随時、ホームページで情報を公開していますので、ぜひご覧ください。

https://theatreforall.net/support/

そのほか、THEATRE for ALLについての情報はSNSでもご覧いただけます。SNSでは配信作品やイベントの情報に加えて、THEATRE for ALLのサービスの舞台裏をお伝えする「バリアをフリーにする舞台裏」などのオリジナルコンテンツを配信しています。またYoutubeでは、ラーニング動画やイベントのアーカイブ動画も続々と追加されています。ぜひフォローをお願いいたします。

https://www.instagram.com/theatre_for_all/

note　https://note.com/theatre_for_all/

https://www.facebook.com/THEATREforALLproject

アメーバブログ　https://ameblo.jp/theatre-for-all/

YouTube　https://www.youtube.com/c/THEATREforALL

＼みんなの劇場を支えよう！／

THEATRE for ALL事務局
（2021年4月～2022年3月）

統括プロデューサー：中村 茜（株式会社precog）
統括ディレクター：金森 香（株式会社precog）

プログラム制作
制作統括：兵藤 茉衣（株式会社precog）
制作・コミュニティ運営：小林 あずさ（株式会社precog）
制作・管理：林 芽生（株式会社precog）
制作アシスタント：西 多恵子（株式会社precog）
バリアフリー制作マネジメント：谷津 有佳（株式会社precog）
企画協力：山上 庄子（Palabra株式会社）、大高 健志（株式会社MotionGallery）

ラーニング事業
ワークショップデザイン：栗田 結夏（株式会社precog）
プログラムマネジメント：山本 さくら、星 茉里

劇場をつくるラボ
ディレクション：山川 陸（一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL）
クリエイターチーム：板坂 留五、梅原 徹、渡辺 瑞帆
プロジェクトマネジメント：黒木 優花（株式会社precog）

広報・コミュニケーション
マネジメントリーダー：小仲 やすえ（株式会社precog）
マネジメント：関 萌美（株式会社precog）、宮崎 淳子
箕浦 萌、長谷川 葵（以上、株式会社precog）
コミュニケーション企画協力：篠田 栞

WEB運営・保守
マネジメント：小野寺 研斗（株式会社precog）
制作・保守：廣瀬 絢、佐野 譲（以上、株式会社おいかぜ）

法務ディレクション：水野 祐、高橋 治（シティライツ法律事務所）

アクセシビリティ監修
伊敷 政英（サニーバンクアドバイザー）、
岡上 洋子（株式会社メジャメンツ、サニーバンク運営事務局）、
サニーバンクのワーカーのみなさん

アートディレクション/デザイン
オフィシャルデザイン：いすたえこ
デザイン：山口 知香
イラストレーション：渡辺 明日香・Akari

アドミニストレーション
マネジメント：森田 結香（株式会社precog）
デスクアシスタント：岩井 美菜子、河野 真紀、齊藤 浩子（以上、株式会社precog）

連絡先
THEATRE for ALL事務局
https://theatreforall.net/
電話：03-6825-1223 （受付時間 平日10:00～17:00）
FAX：03-6421-2744
MAIL：tfa@precog-jp.net

※当報告書は、2022年3月末時点の情報・データを元に制作しています。